

主にある幸い

キリストは、わたしたちの神であり父である方の御心に従い、この悪の世からわたしたちを救い出そうとして、御自身をわたしたちの罪のために献げてくださったのです。

ガラテヤ書 1:4

この世が善い所であったならと、きっとみんな願っている。どの家庭にも明るい笑い声があり、学校には学ぶ喜びや友情が満ち、誰もがやりがいのある仕事について、病気になっても年老いても安心して暮らせる社会を。これではまるで政治家の選挙演説のようだけれど、でも、こんな世の中になったら自殺なんてなくなるんだろうと思うと、ふっとうれしくなる。自殺だけでなく、さまざまな犯罪もなくなって刑務所なんていらなくなったら、それこそ最高！

ところが、キリストは私たちをこの悪の世から救うために、まず、この世を善くしようとはなさなかった。この世を変革するのではなく、そこに住む私たち一人ひとりの罪を負い十字架について、ご自身を献げてくださったのだと聖書は告げる。

イエス様がこの世でどのように生きられたかは、福音書に記されている。ヨハネが弟子をやって「あなたは来るべきメシア(救い主)なのですか」と問わせた時のお答えは印象的だ。

イエスはお答えになった。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。

わたしにつまずかない人は幸いである。」マタイ 11:4~6

イエス様は病人のために病院を建設しようとはされなかった。貧しい人たちのために福祉政策を徹底しようともなさらなかった。死んだ人は千の風になり、鳥になったり星になったり私たちのすぐそばにいるんだよと言って、慰める必要もなかった。

イエス様ご自身が癒し主であり、イエス様のもとには全き幸いがあり、人間の最大問題である死を滅ぼし、人を永遠に生きる者としてくださるのだから。イエス様の内にはすべてがあると告げ、その後、このイエス様に「つまずかない人は幸いである」という意味深い言葉が添えられている。

この大阪狭山の地でも、イエス・キリストをわが救い主と信じる者が、毎週毎週、雨の日も風の日も集められて、十名足らずで日曜礼拝を守る。感動的な聖書講話が聞けるわけでもなく、あっと驚く奇跡がなされるわけでもない。いつまでたっても「変わらないよなあ」とお互いにため息をつくことだってある。でも、ただ一つ、「わたしにつまずかない人は幸いである」というイエス様のお言葉の真実だけは、私たち一人ひとりが証していると思う。なぜこうして礼拝を守り続けることができるのか、それは一人ひとりが、自分がどうであれ、家族がどうであれ、社会がどうであれ、ともかくイエス・キリストこそ救い主であり、このお方の他に救いはないと信じているからだ。すなわち、たとえ集会に数々の問題があり、また自分自身に愛想を尽かすことはあっても、イエス・キリストにだけはつまずかないで、どんな時にもイエス・キリストを求め続けているからなのだ。そして毎週毎週、何はなくとも「わたしにつまずかない人は幸いである」という、イエス様の祝福に満たされて、最後の賛美と共同の祈りを終える。

先日の日曜礼拝では、マルコによる福音書 7 章を学んだ。

それから、イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」・・・「すべて外から人の体に入るものは、人を汚すことができないことが分からないのか。それは人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、そして外に出される。こうして、すべての食べ物は清められる。」更に、次のように言われた。「人から出て来るものこそ、人を汚す。中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」マルコ 7:14～23

なるほど、なるほどと深くうなずく。悪は外から入ってくるものではなく、その根っこが自分の内にあるものなら、外をどんなに改革しても、良い憲法を作り、社会保障を完全にしても、人を善くすることはできないのだ。どんな快適な家に住んでも、願い通りの仕事や結婚をしても、それでも善い心は生まれず、私の言葉や行いが周りの人を汚し続けるとしたら、がっかりだ。がっかりだと言っても現実の私は、時として、いまだに人の悪しきを思ってしまうのだからどうしようもない。

若き日から聖書を学び続け、イエス・キリストの十字架による罪の赦しに唯一の希望を見だし、ここにしか生きる道はないとイエス様にすがり続け、確かに、罪赦された喜びと平安に満たされて心の限りに主を賛美する者とされたけれど、「人から出て来るものこそ、人を汚す」というイエス様の御言葉は、ますます私自身に向けられているのを感じる。だからこそ、自分ではなくイエス様を一心に見つめ、自分の思いにではなくイエス様の御言葉に耳を傾け、どんな暗闇の中でも「恐ることはない。わたしだ」と言ってくださるイエス様に望みをおいて生きていく。「気を落とさずに絶えず祈りなさい」ルカ 18:1 との御言葉を忘れず、祈りをこそわが日々の務めとして。

今死を恐れている人がいるなら、愛する人を失って嘆き悲しんでいる人がいるなら、この歌を歌ってあげたいと切に思う。というのは、「主イエス、死に勝ちたまえり」という歌詞があまりにうれしくて、くり返し歌って、歌うだけでは気がすまず、ハーモニカを取り出して吹いているのです。

- 1) すべての民よ よろこべ
主イエス死に 勝ちませば
陰府のちから はや失せて
ひとのいのち かぎりなし。
- 2) 明日をもしらぬ 世に住み
涙の谷 たどる身の
悲しみも 悩みも消え
今は喜びに あふる。
- 3) 主は栄光の 御座につき
みつかいらは ほめ歌う
「主イエス死に 勝ちたまえば
人は生きる とこしへに」